

翻刻『悪源太平治合戦』（下）

翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館所蔵の七行九十丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ッ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究會）の会員によってなされた。

井原悠、平井淑子、八百板朋子。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

本作には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原本の通り翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って活用されることを願いたい。

（山田和人）

頼朝は見聞に付ケいとぞ。思ひは胸にせく。涙やるせも泣しづみ。しばしいらへもなかりしが。や、有て顔ふり上。拷問は慮。身は醢に成とても。兄義平の行衛は存ぜず。朝長といひ父上迄空しく討れ給ひし上は。最早片時も生ながらへる所存なし。サアく早く首討て愁傷の根を断給へと。思ひ切つたる御顔色。ホ、ウよい覚悟。義平が行衛しられれば生置て益ない頼朝。ソレく難波首はねい。畏つたと立かゝれば。禪尼声かけ先ッ待テく。覚悟で討る、頼朝の。命かばふにあらね共。逆の事に義朝を長田庄司か討たる次第。汝くはしく聞しよし。(四十七ウ) 語り聞さば其間に頼朝も暇を得て。一遍の念仏も父の手向と成へきぞ。早うくと有ければ。難波は覺もしたり顔。忠宗が口うつしいかめしうこそ語りけれ。

いで其此は。平治元年臘月中旬。待賢門の軍破れて。左馬ノ頭義朝東国に落行給ひしが。尾州知多の郡。野間の内海の住人。長田庄司忠宗は御家人といひ鎌田が舅彼是遁れぬ縁により。館に入てしかくの御頼。聞と等しく長田が悦び。かゝる時節なればこそ。身不肖の忠宗を御頼有こそ有がたしと。直に花麗の別家に請じ。善尽し美尽し(四十八オ)て靈ない饗応。義朝も安堵の日数送られしが。庄司心に思ふやう。当時盛の平家に背き。世になき源氏の大將をかくまひ達せば家の破滅。何とぞ儻討て出さんと。数多の家来に合せ。明れば正月三日の寿取納め。初湯をひかせ申さんと。前日より風呂屋をしつらひ。しめかざり引はへて。水走りの板かゝみの板冷水熱湯を汲ならべ。浴衣手拭湯上等入湯の具ことく。組竹の衣桁にかけ。御馳走の諸役人湯加減を試て。早御入と待かけしは。花麗にも又危けれ。

其時父に(四十八ウ) 従ひし金王鎌田は有らざるや。それはぬからぬ庄司が方便。若敵方より不時に寄んも計れず。金王丸見て参れと浜手に遣はし。智の鎌田は大酒を好めば是幸い。一ト間に招きひらじゐに。数献重て酔伏せためらふ内に。義

朝は浴衣一ト重に廊下を過キ。何心なく入給ふ。風呂屋の廻くりは組子共。我レ先きに押シふせんと手ぐむ手引て追ッ取り巻ク。義朝驚きヤアラ心得ぬ長田が振舞。扱は心がはりよな。相伝の恩義を忘れ。主に敵対人面獸心。たばかれたかエ、口惜やと。はかみをなして怒らるれば。忠宗ひるまずからくと打笑ひ。昔は(四十九オ)昔今は今。威勢さかんの平家に従ひ討取ッて手柄にする。か、れくの声につれ寄りくるやつ原事共せず。左右に掴んで投げ付ケ。打付ケ人礫はらり。はらくくくふるあられ。板屋にたばしるごとくにて手いたく働給へ共。多勢に不勢。剩刃物一本有ラされば。心に任せぬたるみへ付ケ込ム組子共八方よりおり重る。義朝暫しと声をかけ。運尽て今死る共。此儘に討れんは。かばねの恥辱歎ケかはし。情に生害させてくれと。涙をながし頼まるれば。長田も不便と思ひけん。九寸五分の首搔刀。投ケ出せば追ッ取ッて弓手の脇腹。かたと突立てめてへきりと引廻せば。(四十九ウ)後に廻る忠宗が振り上る太刀かけに。水もたまらず首討たりと。語れば頼朝ハアはつと。五臓をこがす悲しさに身をふる。はしたる無念泣。かゝる横死も平家の為。目前の怨敵討タで此儘果るは不孝恥を凌でながらへば二度源氏の代にかへし。長田を仕置にせん物と。即時にかはる心の励。人にしられじ悟られじと。面に隠し禪尼に向ひ。親兄弟爰かしこに討死し。某一チ人生キながらへる所存ンなれど。せめては朝敵の名を取り相果し。一チ門のぼだいとはん為遁世修業の志。御推挙有ッて我命御助ケ下されなば。生々世々の御ン情と涙と。俱にの(五十オ)給へば。禪尼は助ケかへしたき方便に望む物語。聞イてとまる頼朝の心一致に命乞。よき折からとす、み寄り。ナフ清盛。今の願ひを聞れしか。出ツ家して一チ門のぼだいとはんとは。年シもゆかいでしほらしい。殊更家盛にいた頼朝なれば。わらはも一トしは憐ふかし是非共助ケかへさるべし。頼く一向の願ひに

清盛当惑^{とうわく}ながら。ほ、く^ウと打点^{うちうてん}き。ホウ御仰背^{ごおやうそむく}にはあらね共。朝敵^{せがれ}の粉^{こな}を我儘^{わがまま}に助る筋なし。善^{ぜん}悪^{あく}共^{ども}に院^{いん}の御所^{ごしょ}へ窺^{うかが}つて。御指図^{ごしずぶ}に任せ申さんと和らぐ詞^{ことば}に池殿^{いけどの}も。少^すシヲを得給^うふ所^{ところ}へ。瀬尾太郎兼康^{せおのたろうかねやす}御前^{ごまへ}に罷^かり出^で。仰付^{おやうけ}ケられし通り朱雀^{しゆしやく}へ立越^{たちこへ}。(五十ウ)義平^{よしへい}が種^{たね}を懷妊^{くわいにん}の芙蓉^{ふよう}と申ス女。詮義^{せんぎ}仕^しり候^{こう}へば。鳥目^{とりめ}五十銭^{ごじせん}の富^{とみ}に入^い。則^{すなは}チ札^{しやく}に当^{あた}りし非人^{ひにん}に彼^{かの}傾城^{けいせい}を渡^{わた}し。夫^そレより行衛^{ぎやうゑ}存^{ぞん}ぜぬと申ス。いかゞ仕^しらんといいひも切^きせず手ぬるい。逃^{にが}ケ隠^{かく}る、共天地^{あまのつち}の間^ま。足限^{あしかぎ}り搜^{さが}出し男子^{なんし}ならば首討^{くびう}て見^みせよ。汝^ななれば構^{かま}なし。いそふれ瀬^せノ尾^お早^{はや}来^これと。凜^{りん}々^く。魏^ぎ々^くたる詞^{ことば}に恐^{おそ}れず池^{いけ}の禪尼^{ぜんに}。院^{いん}の御所^{ごしょ}の願^{ねが}ひ立^たッ迄^{まで}頼朝^{よりとも}はわらはが預^よる。といふて連^つれてはいなぬ。直^{ただ}クに盛久^{もりきう}に預^よけ。栗田^{あした}口^{くち}の新^{あらた}館^{かん}に指置^{さし}程^{ほど}に。怪^け我^が遇^あもないう。大切^{たいせつ}ッにしておくりやれと仁愛^{じんあい}重^{おも}き一^{ひと}言^{こと}に横紙^{よこがみ}破^{やぶ}りの清盛^{きよせい}も。押^おシていはれずさから(五十一オ)はぬ。親^{おや}の威光^{ゐくわう}のかげ高く。か、げ添^{そへ}たる玉^{たま}だれの。雲井^{うんせい}をうつす花^{はな}の御所^{ごしょ}立^たちわかれてぞ三^{さん}重^{じゆう}へ帰^{かへ}りける。忘れ^{わす}れめや。萱^{かや}が軒端^{のきば}と詠^よじたる遠江^{ゑんみ}ノ国菊川^{くにきくがわ}の宿^{しゆく}はづれ。諏訪^{すわ}の原^{はら}の小百姓^{せうひやくしやう}天目^{てんめく}の弥源次^{やげんじ}といふ親仁^{しんに}有^あり。八町^{はつちゆう}礫^{れき}紀平^{きへい}太^たが入聲^{いしやう}したる舅^{しやうしゆう}にて。そこら名^なうてのいがみ者^{もの}直^{ただ}くならぬ氣^きに志^{こころざ}す。仏^{ぶつ}事^じ供養^{くぐやう}の経営^{けいぎやう}は。殊勝^{しゆしやう}にも又^{また}いふかし。芙蓉^{ふよう}は都^{みやこ}に咲^さく花^{はな}も今はしほれし前垂^{まへだれ}かけ。紀平^{きへい}太^たが妹^{いもうと}と形^{かたち}も所体^{しよたい}も引^ひかへて。客^{きやく}を儲^もうけはき掃除^{そうじ}。風巾^{ふうきん}に清^{きよ}むる皿鉢^{ざらはち}はかけた疵者^{きずもの}娘^{むすめ}のおさめ。生^うれ付^{つけ}キなる啞^おにて。諸事^{しよじ}を仕形^{しかた}の取り捌^{さば}仕舞^{しまひ}(五十一ウ)為業^{ゐがふ}と鬧敷^{いどがしき}。中^{なかつ}に取^とまぜ。搗^{つく}麦^{むぎ}を箕^みでひる手品^{たへ}なよやかに。見る程^{みるほど}惜^{おし}き器量^{きりやう}也。イヤ申^{まう}おさめ様^{さま}。けふはおまへのか、様^{さま}の祥月^{しやうげつ}キ命^{いのち}イ日^ひ。同行衆^{どうぎやうしゆう}を呼^よねばならぬ親仁^{しんに}様の云付^{うんけ}ケ。追付^{おきやく}ケお客^{きやく}も見^みへませう。大かたにして置^おかしやんせ。夫^そレはそふと死^しナしやんしてモウ何^{なん}ン年^{ねん}に成^なりますへと。尋ね^{たず}ねれば両手^{りやうて}を出^でし。十^{じゆ}の指^{ゆび}をひろげて見^みせ。又^{また}引^ひこめて今^{いま}ン度^どは九^くつ。ム、十九^{じゅうきゅう}年に成^なルかいな。嘸^{なほ}や

生きてござんすなら其様不自由が苦にならふ。品かたちなら氣達テならいはふ所のないおかた。ほんにどうしたはり合で。
耳は聞へて物いはぬ。啞にはならしやんしたと悔を聞て。涙くみ。納戸（五十二才）の方へ指をさし。我身を教傍に
有ル。鉢と鉢とを打当テて。しほれし体にこなたも涙。ムウ何シぞの罰が我身に当タリ。此身に成たとおつしやるのか。ム
ウあきらめて居さしやんすが。一チばいいとしいくと。思ひやりつ、俱涙。奥より出る主ジの弥源次。底意路悪ルき面がま
へ睨廻して座に直り。ア、又してもく役にも立ぬ頑のくり言。小姑と借錢はないのがよいと世間の譬。いつからや
らのら聲の門八が。都から連れて戻つた妹の喰つぶし。此辛い世の中に追いまくらふとは思はず。懇そふに点きさ、やき。
大きなあほうの畸者と我娘にさへにく（五十二ウ）て口。おさめがつらさ氣の毒さ其身は無と眺れば。あぢきなき世を
しほくと。打恨たる氣色にて指うつ。むきし折こそあれ。音もさへ渡る。尺八に一目を忍ぶ笠ふかく。薦僧一人門口
に報謝を乞てイめり。何がな此場のつき汐によその思ひを汲み分けて。心一ぱい指出す手の内を扇に情ケ。ハア御合力に
預る上。近比申スはあこぎながら逆の事にお茶一トつ施に預りたしと。いふに内より弥源次声かけ。幸いけふは噓が命イ
日。薦僧も坊主の内。こつちへはいつて。ゆるりと茶でもたばこでもまいりませ。然らば御免と入風俗。小氣味悪ルさに
おさ（五十三才）めが目くばせ。芙蓉もそれと悟しにや。ドレお茶上んとふたり連。顔を背て。奥に入ル
門内でも笠を取ぬが宗旨の掟。此儘暫時の足休めと。揚口に腰打かけ。天蓋のとちめより見廻し見廻す曲者と。しらぬが
仏の吊逆。程なく来る在所の同行四五人連。どやくと入ルやいなや大あくら。ア、毎年ンくお祖母の命イ日。こちとらを
呼とつて。箸をとらす御雑作千秋万歳忝い。ナント彦作さふではないか。ハテ爰な庄屋殿は。祝言ン振舞に呼れたと思ふ

てさふな。けふは法事でござるぞや。エツ此わろとした事が。夫レ程の事しらい(五十三ウ)で。村中のたねがならふか。
侮あなどつて羅ふまいぞ。や侮るで思ひ出した。聞きけば是の聲殿門八が都から。よい女房な妹を連つ立つで。あなどらせにわたせた
と在所中の取とぎた。殊に腹もぼてれんで居られるげな。品によつたら此庄屋が。マタあなどつてもおませうか。とふじや
く地ウと世話せわやき顔。かけかまひなき薦僧こもぢうも。様子いかにと吹フシクさせる。

ム詞、時節じせつからの掛人かひりど。纔わづかな作りをする弥源次。目に立つかして問とふて下さる。マアいづれも忝とがい。したが聲めが妹とぬかし
て直ちくは大きな偽いつわり。どふでも何なんぞ尻しりみやの有めそうな女良めじやてや。そりや又なげに。サレバサ。妹でない証しやうこ拠こは。
折々こかげで(五十四オ)主あしらひ。孕はらんで居るを大事にかけ。若君の。姫君のと。とでもない事ぬかす故。君有ル人の
娘かと氣を付つければさふでもなし。立たちち振舞のひつばなし。傾城けいせいくさい所も有り。何にもせよ吞の込みぬと。とうからおれも見
付つけて居れど。腹ながきさへ産うましたら。胴空どうからは今迄の飯代はんだいに売かつ分別ぶんべつ。もちつとじやと了りやう簡かんして。高い物をくはせて置おく
と。咄どす間に薦僧すゐは。すつくと立たつて笠かさぬぎ捨す。相図あひづの高音吹ねき立たれば。郎うら等信楽軍太しんがくぐんたいを始め数多あまたの家来けらい一いち時に。爰こかしこ
より顯あれ出で。庭にはに込こみ入いル捕とつた声。同行中どうぎちうは恠びつくに物も得えいはず逃はル帰かへる。(五十四ウ)思おもひがけなき弥源次が驚おどろきながらさ
はがぬ顔。見向みむかキもやらず上座じやうざに通とほり。梵論ぼんろんの姿と成なつたるはうぬらに油断ゆだんさせん為。誠は某平家の家臣けしん。瀬せノ尾おノ太良兼たうかね
康やすといふ者。清盛の上意じやういを以もつて悪源太義平が胤ひなを懐むせし朱雀しゆくわの傾城けいせい。芙蓉ふようが行衛詮義ぎんゑしんぎの為。東国へ下る所。当所す諏訪すわの
原の百姓。弥源次方に都めきたる懐胎くわいはいの女。五ヶ月前より逗留たうりうと聞きしより。とくと実否じつぷを糺たづさんと思おもひ。かくの通かり形かたちを
やつし報謝ほうしゃに事よせ。最前さいぜんより窺うかがひ聞きくに。朱雀しゆくわの芙蓉ふようをかくまひ置おしは違ちがひなし。召捕めしとつて産落さんらくさせ。男なんしなれば首を討うつ。

(五十五才) サア縄ぶつて手渡する。さもなくばふんごんで此方から縄かけふかさ、何シと。くときめ付る。

地色ハル

身動きもせずせ、ら笑ひ。夫レ程になされず共。高が女コ独じやないか。仰山な詮義の仕様。併肝心勘文の。きめ所がも

ちつと楚忽な。イヤこいつ慮外の雑言。大概に割符が合つたる故。連レ帰る瀬ノ尾ノ太郎。何を疎略ないへきかんと。刀に

手をかけひしめくをサレバイナ。惣体かうした科人ンには。身がはりの贗者のと。手をとらずが常の事。それと慥にしれ

ぬ内。若贗者をひとつとらへ。正真の芙蓉とやら。助ヶ置力は後日の怨。なぜとつくりと吟味をとげ。まつこときやつに(五

十五ウ) 極らば懐胎の世忤。産落す迄待ツには及ばず。首討てお登なされい。ハテ母めさへ殺して仕し舞ば。腹ながき

は持ち籠りの自滅も同然。何シとさふでは有ルまいかと。邪見の詞を最前より。立チ聞クおさめが身に冷あせ。ぞがみ立て

ふるひ居る。兼康ほくく打うなづき。ムウこりや尤。既に唐の老子とやらいふたわけ者。腹の中に八十年白髪になつて

生まれしと聞及ぶ。其格に隙取ッては。氣がいてこつちにたまらぬ。親を殺せばおのづから。小忤共にくたばるこんな

ん。面白しく。イデ引出して一ト詮義と。かけ込をア、やすいく。さふさはがしうなされては。風をくらふて逃ケ(五

十六才) 走りしおるまい物でもなし。此親父に任さしやませ。正真か贗者か極めて上ケませう。ヲ、然らば暫く汝に預ける。

其間身は休足せん。必用捨致すなど。家来引連レ一ト間の内のさばりへ返つて入にけり。

放逸無暫の弥源次は始終を独呑込で。納戸の内より引出す。芙蓉に引添おさめが歎けき耳にもかけずがはと投ケ付ケ。コリ

ヤ女郎よ。大方子細は聞たであらふ。ぐどく問ても身の上を心安うはぬかさぬ頼付キ。そこを又骨折ずに詮義の仕様さま

く有。儕レが首にかけてけつかる守り袋。子をなす程の義平なれば印シがなうては叶ぬ筈と。(五十六ウ) 立寄て懷よ

り守り袋を引出す。ノウ夫レは大事の物と取り付ク芙蓉を突飛し。留る娘を片手に引居。見れ共く是ぞといふ。証拠なれば軻しが。よし理話や口先で白状はしおるまい。裏の畑へ引出しあたまから責せつてう。筋骨をひしいでいはせる。サアうせあがれと引立るをおさめが驚もぎ放し。中に隔唯おんく。拝つ泣つ留めても。エ、面倒な畸めとはり退踏退ケ聞入レねば。物は言たし言れはせず。詮方尽て有合す尺八取り上歌口を。露にしめせし一ト唱歌。夫に預る妹御の若や尋る人ならで怪我。過も有ルならば。身の言訳は何とせん。問事有ラは自が密に聞いて参らせん。お情有やと、様と笛の(五十七オ)呂律にありくと。言いたい事を吹分けて。立ッたり居たり手を合せ涙。なからに願ひける。

弥源次つくぐ耳そばだて。昔漢の臥龍先生。北狄を退治の時。士卒毒水を飲で嘔と成るル。軍師其故をとはん為。笛を吹かせて子細を聞ク。日本に万六笛にて物いふ事有リまつ其ごとくいはいで叶はぬまさかの為。尺八と物書ク事ちいさいから習せてこましたが。今漸と役に立たな。いか様おれも年寄つてむごいめは見とむない。そんならおれに成りかはりめろさために白状させい。ハテ褒美さへ下されたら親の物は娘の物。みんなそちがかはいさと猫なで声は狼の。ほへるより猶恐ろしき眼を。残しおくに入。跡にふたりは。顔見合せ胸撫おろすも暫し間や。心も心ならざ(五十七ウ)れば手を引かたへに伴ひて。身の上尋る尺八の音色譚敷吹きなせり。とふもうし。とはぬもつらき梓弓。引カる、縁の。我なれば。心が、りはなき物を。明カして聞せ給へやと物いふごとく問かけられ暫し。涙にくれけるが。辺を見廻し小声になり。日比から懇に真実見へし御シ情今迄包むも道ならねど。世を忍ふ身の跡やさき案じて夫レと打明ぬは。堪忍して下さんせ。成ル程瀬ノ尾が推量の通り。悪源太義平様の胤をやどした芙蓉とはわたしが事。又おまへのお連れ合門八様シは。もとが源氏譜代

の御家人。八町礫紀平太といふお方。待賢門の軍の後より。(五十八才) 連立のいて様々の御介抱。けふもけふ連横須賀の明神へ。平産の祈禱にとて遙々の御参詣。其かひもなく見咎られ殺される連是非もなし。去りながらいいしいはおなかの赤子。月日の光りが拝せたい。ならふ事なら此場の難義。救ふてたべと伏軫び声をも。立テず泣居たり。

始終とつくと聞すまし氣遣いなされな呑込んだ。万事は爰にといふ事も心がせければ仕形もならず。胸を教ておんぐ門帳の内へ押入ぐ。夫トの帰りを待ち兼て表テへ出たり引ッこんだり。狂氣のごとく立騒ぎ途方にくれし折しも折。何心なく夫トの(五十八才) 紀平太旅装束に菅笠の紐をとくく立歸れば。としや遅しと走り寄り奥の一間に指をさし。首打ッ真似や縛る真似。色々あせれど氣も付かず。ナンジヤきやうとい顔付キして様々の仕形はすれど一トつも合点が行かぬ。マア氣をしづめい何事じやと。落付ク程猶心せき夫トの菅笠ひつたり。干たる麦を救ひ取りさび返しぐ。向ふへ廻つて衿かき上。サア首討テといわぬ計り合掌したる顔付キに。紀平太きよつと傍に寄り。有ル箕ではさびもせず箕売は笠で物をひると。下世話の譬をして見せしは。ム、箕のかはりといふ身がはりに首討テといふ仕形かと。(五十九才) いひも切らぬにいただき付キ。ハット泣出す大声は。悟る夫トの悲しさを思いやりたる涙也。

コリヤ泣ク計りでは子細がしれぬ。一ト筆かけよとせきにせいたる詞に点きすげ笠に。すくひたる麦かきならし指を筆。書クに氣を付ケ読下タせば。瀬ノ尾太郎といふ侍妹御を芙蓉様とよう知ッて。とつさんとひとつに成り首討ッとして奥に居ル。読も終らず氣色をかへ奥へ切り込ム其勢ひ。あはてふためき取り付くを。エ、邪魔ひろくな崎者。舅成リ連用捨はない兼康ぐるめ討チ放しお供して立退思案。爰を放せと振り切れば猶抱留片手にて。又かきならす笠の内。悪人でも親は(五十九

ウ)親。とつさんの命を助け私が首を身代みかはりの。御用に立て下さんせと。夫地ハルトが読よめば手を合せ。しやくり上たる心根こころねを。思ひはかりて立留とまり。スリヤ其方そのは我々が身の上うへを委くましく聞。是非ぜいひに及ばず御身にかはり。兼康をたばかつて芙蓉殿の御命を助ケんと。思ひ詰つめての願ねがひよな。思へば便びんなき事ながら。親ウの為夫トの為死しんでくれい女房ウと。むせ返ればむせ返中り。とくより覚悟かくこは極めて今更此世の名残なごりかと。顔見ればかきくれて目も明スエテキ兼し風情也。

地ウ 紀平太は菅笠すげをおさめが前に直し置なをキ。言こと舌せんせつ不自由じゆうにあらずんば言置ことキ事も有ルべきが。夫レさへ叶はぬ身の因果いんぐは(六十オ)せめては是に遺言ゆいごんを書キ残せよと教おしれば。嬉地中しげに引寄せてなくくつる言ことの葉スエハルを。涙ながらに読よめ下す。神仏しんぶつのお慈悲じひより有がたきは夫トの心。畸かたはな我を年とし月の御不便びんがり。あいその尽たお顔も見ず可愛かはいがつて下さんしたに今といふ今死ねばならぬ。品地フシになる。命いのちは惜おしいと思はね共お前独ひとりに別れるのが悲かなしうてく。是ばかりは迷まよひの種たね。したがおまへもまだ若い身。鰥やもめでも暮くらされまい。死んだ跡ではわたしが様な畸かたはでない。お内義様を呼しやんせずば成りますまいと。読よめ内にふりあをのき。顔ウつくくぐと打守うれば。アノ訳わけもない心の疑うたがひ。アノ邪見じやけんな舅しやく弥源次。(六十ウ)是迄永々ながかげに成り日向ひなたに成り。大分くシ苦勞くろうに成った上。今日の只今では主君の命にかはるそなた。鬼畜きちくの身でも此後チに女房が持れる物か。一ッ生いっせい鰥やもめで暮くらすぞやと。いひも切ぬに絶すがり付つキ。忝はづかしい共いはいねどしれた泣声なみこゑに。夫も涙なみとぐめ兼あり中の。幾重いくゑかぬらしける。
ユリ。

地ウ いつ迄斯かくとかこちても果はしなきと思ひけん。歎うキを留め座をしめて手を合せたる覚悟かくこの体てい。今いまで最期さいごと観念くわんねんし刀の柄えに手をかくれば。ヤア夫ここそは無益むやくの殺生せっしょう紀平太待まちテと声をかけ。納戸地色ウの内より立出るは舅しやくの弥源次。弓ウン手に芙蓉が首

提馬手に用意の種が（六十一オ）鳥。火蓋を切て指向たり。

見るより夫婦は七転八倒早御首を討つたるかと。かけやらんにも飛道具無念ながらためらふ所へ。瀬ノ尾太郎兼康家来引具しのさばり出。ヲ、重々汝が働、褒美は返つて都よりさたすべし。イデ請ケとらんと芙蓉が首面体とつくと見改め。した顔にて立帰るを近カ比御苦勞くと目札へ式札門ト送るか油断を見せぬ種が鳥。跡をひつしやり指かため鑑しむる其丈夫さ。内にはおさめが有ルにもあられず夫の刀をぬくより早く。既に自害と見へけるを飛か、つて弥源次が。ほでてんがうをまつるなど抜キ身をもぎ取りなげ（六十一ウ）付くる。とたんのたるみを紀平太は付ケ込で切かくる。さしつたりと筒にて請ケ留。ヤレうろたへ者。主人に手むかふ主殺しめと声かけられ。イヤ主人とはいづくの誰し。たは言吐な老ぼれと又切り付くるを飛しさり。此若君は主君に有ラずや眼つぶれと懷より。抱出せし稚子の初ッ声聞イテ夫婦は恟り。何其世倅を若君とは。ヲ、忝くも清和天皇の後胤。左馬頭義朝の御嫡男。惡源太義平公。芙蓉が腹に懷されし若君の御誕生。産屋を見よとかけ上り。襖をさつと押シひらけば。円なる野面の石恭々敷（六十二オ）石碑に立テ。表テに彫たる五字の名号前には芙蓉が首なき死骸。脇つぽよりあばらをかけ切ひらかれて血まぶれ。見るもいぶせき其有様おさめは仰天紀平太も鞆。果たる計なり。

弥源次は若君を包し儘に上座へ直し。遙下カつてどつかと座し。善の利益は目に見へねど。惡クの報は目前に。廻る因果を身の懺悔夫婦共によつく聞ケ。もと某は源氏相伝の侍猪股小平六といつし者。此若君には曾祖父君為義公の御不興蒙り。浪人のまづしき暮し女房が懷胎にて。臨月に及べ共木綿一ツ尺調置ク。始末（六十二ウ）もなければ諺にいふ貧の

盗。思ひ付いたる街道の夜働。十九年以前の今月今晚。此所に出往來を待つ所に。年比は三十計り容貌いやしからざる女。通るかゝるを櫛とらんと。何んの苦もなく討ちはなし。衣類をぬがせ骸を見れば是も同じく懷胎にて。臨月共見へたりしを其儘に。埋しは則ち是成ル右の下。其夜我ガ女房も恙なき平産。我レは夫レより齒に血を付ケ。毎夜く道に出旅人の通りを窺ふに。頻に赤子の泣ク声す。耳をすませば石の下合点行ずと掘かへすに玉の様な女の子。疵の口より生れし体。ハア、よしなき事を仕出したり(六十三才)と悔共詮方なく。連立歸つて子細を語れば常から心弱き女房。血の上の恟りにハットいふて息絶たり。夫レよりふたりの乳呑子を育る方便に尽はて。我子には印を付ケ街道筋へ捨子となし。彼土中にて生れしを育上ケたは是成ルおさめ。其後誰レがいふ共なく夜啼石くと沙汰せらるゝがうとましき。住家を爰へ移しかへ南無阿弥陀の五字を彫付ケ。朝夕の念仏もせめて後世を助ケン為。母の死血咽に入。耳は聞へて物いはぬ啞と成つたる崎の娘。それ共しらず此親仁を誠の親と心得て。明ヶ暮の孝行を請ける程猶昔の(六十三ウ)悔。所に今日瀬ノ尾太郎討手に来る子細を聞ケば。重恩有ル主君の身の上。実否を糺し思案こそ有べきと。詮義すれば覺の有ル此守り袋。扱こそ先年捨たる娘と初メてしつたる傾城芙蓉。然るにおさめが夫トが主君と聞しより。身がはりに命を捨てといふ健気さ。牛頭馬頭あほう羅刹でも何とてそれが殺されうぞ。とはいへ瀬ノ尾に芙蓉を渡されば。御しいたはしくも義平公の御胤迄。敵の手に渡る物と慥貪邪見の指図をして。親が手づから首を討ち直々に腹をあばきしは若君の御命を助ケ申さん為斗り。月こそあれ日こそあれ我カ手にかけし(六十四才)おさめが母。祥月命イ日のけふに当り一ツ生子しらず親しらず。適娘としりながらとつ様か我子かといふ間もなくむごたらしい。狛師の所作をして鹿猿か何んぞのやうに。切さいなむも天の責廻る報ひの算用

ぞと。親の懺悔に身の上を聞いて驚くおさめが軟々き。扱は我カ為親ならぬ親の恵の有りがたさ。拝む手先きにこもりつる。礼は涙の幾千度。さつしやりたるしやくり泣不便さ勝る鬼薊。しほれかゝりしごとくにてむせぶ。心の哀さよ。紀平太も涙をながし。聞及とたる猪股殿旧恩を忘れずして。適逢イ見る娘を殺し。若君を安穩に救ひ給ふは(六十四ウ)古今の忠臣。かゝる勇士の埋れて弓矢にかはる鋤鍬の。縁なればこそ親子となる八町礫が身の幸い。生々迄忘れぬ大恩。此上ながら力ヲを添若君の生立チを。御見届下さるべし偏に頼存ると。一向願へど返答も。指うつむいて居たりしが。ハ、ア有りがたや添や。火宅を通る、時来れり。智や娘のわりなき頼もだしがたくは思へ共。罪業深き小平六。武士を立る所存はなし。今より菩提の門ンに入仏道修業の志と。誓ふつと押切。御辺は是より若君の御供して諸国の味方を駈あつめ。再び源氏の白旗を天地の間に吹靡せ。主君シの汚命を雪むべし(六十五オ)愚老は此家に足をとめ。芙蓉が死骸も石の下タ。先立ツ人と二所に葬り夜の啼の石の跡絶ず。念仏するが亡者の為去ながら。初発心の掟にて魚鳥の肉を喰ふといふ。我は元来是迄に。多くの人を手にかけてし大罪人。精進入にも殺生戒。仏に誓を是見よと。最前の種が鳥目当テは一ト間の障子の内。どうとびく引がねに思ひも寄ぬ信楽軍太。もんどり打てのたれ伏。夫婦是はと驚けば小平六筒投捨。最前シ瀬尾が帰りし時家来の不足。シヤ猿知恵にて忍びのやつを跡に残し置いたるとはよくしつたり。斯迄平家に油断なけれ(六十五ウ)ば。若君の御介抱おろそかには叶ふまじ。くれぐれ頼むは娘が事みなし子の崎者。見捨てやつて下さるななく。若君かき抱き。渡せばおさめが懐へ涙ながらに守り奉り。立別れ行おし鳥の。尽ぬ思ひ羽打重ね。番離れぬ其中に。あたゝめ伴ふ雛鳥は浮木の亀や優曇花の。まれに遁れし御

命。追ッ付ケ四海に羽打て飛大鵬ならんと諫めても。諫かひなき羽ぬけ鳥塙にとまる恩愛離別。互イに恥らふ面と面。裏と裏とはかはかぬ袖涙の。干渴遠江。夜啼の石と代々を経て今に。古跡を残しける。(六十六才)

第四

世は洗薄にうつるといへ共神は和光の塵を離れず。其垂跡を祈らんと惠源太義平は。鎧物の具爽に打抜弓に八幡山。都を西に遠近の便り求て行末は。流しも清き石清水。神垣近く成しかば暫く。幣を奉り。謹上。再拝。抑。我朝に二所の宗廟有り。神風や伊勢に続く鳩の峯。日本第二の宗廟と。崇め敬ひ奉る。いとまさかしき。武烈帝の御代に至て。王孫既に絶なん時応神帝に五世の孫名を。継体天皇と号し。廿七世をしろし召シ。夫れより(六十六才)代々に伝へ来て。天孫日次キの納る事。此御神の。いさおしなり。殊更弓矢を守りの威徳。我しも清和の台を出。祖父の家名を請ケ継で怨を千里の外に退。再び家を發さん事。一句の内に得せしめ給へ。南無八幡大武神。帰命けいしゆ。敬つて白と丹誠無二の祈には心胃も。澄て殊勝なる。時にふしぎや神ン殿の。扉ひらくと見へけるが。白髪たる老翁忽然と顯れ出。いかに義平。汝親子謀反に与し王法をかるんじ。朝敵神ン敵と成たれば非礼を請ケぬ神の法。先祖六孫王経基より。代々源氏へ授し弓矢。今義朝が無道によつて。氏を汚し譽を失ふ氏神の怒(六十七才)天の責。義平が携し。弓を請ケ取り来るへしとの神ン勅。我れは武内高良の神ン早く弓矢を渡せよと相白威風赫々たり義平大きに恐れ入。コハ思ひ寄らぬ神ン勅かな。父こそ無道の名を取ル共。我々兄弟心を合わせ今一戦に勝負を決し。家の汚名を雪がん為。扱こそ擁護を祈しに。我力持子弓迄召されんとは。扱は源氏を見

限て。平家に渡し給はらば、弥先祖の恥辱也。得こそ弓矢は渡さじと詞を放つて申さるゝ。いやとよ義平。三五夜中に照ル月も満ては、闕る影を見よ。光陰矢よりも速に暫しはくもる村時雨。運つき弓の弦切れて。入ル野の鹿の命さへ野辺の草木も（六十七ウ）時を得ば。兵衛佐頼朝に。重て与へ授べしと。弓矢かなぐり高良の神シもとの。官居に入レ給へば。つゞいて扉に入月の。かげも傾く手枕に眠りの夢は。へさめにけり。茶屋が葭簀の。内よりも。走り出る義平公。忙然と傍を見廻し。爰は正しく祇園の社。夢に見へしは弓矢神。八幡宮の宝殿にて。弓矢を神に取れじと諍ひの募る詞の内。兵衛佐頼朝にあたへる弓矢と宣ひしは。扱は怨を報はん者。弟頼朝にて有けるよな。去ルにても我々は父と一ツ所に名を下タし。俱に武運につき弓の矢武心も折レ果しと。悔の涙はらら五臓をしぼる。計也。跡を慕ふて。常世姫斯と見るより走り（六十八オ）付キ。いつよりけふのお帰の遅い故。其氣遣イさ有ルにもあられず。サア戻つてくださんせ。ア、どふやらお顔の色も悪し。短氣を出して下さんすな。朝内を出しましてもお帰りの顔を見る迄は。阿栗殿とふたりしてどふかかうかと物思ひ。御思案の入ル事なら。内へいんでもなりそな事といへど諾も。指うつむき。

夢の吉区善惡に迷ふ心も風さはぐ。真葛が原の人群集見付ケられては悪シからんと。姫を伴ひ義平は又も。葭簀に忍ばるゝ。群集に先キ立ツ。八丁礫紀平次が成立は。男自慢の丸裸百貫道具の力ヲ持チ。片手ざしに指上クれば上に立ツたる牛若丸。直平頭巾に陣羽織薙刀（六十八ウ）かい込り、敷も。絵馬堂に。指かゝれば。数多の見物どやゝと社人交りに寄たかり。是が堺から来た梯子の曲。どんどくと入ますの。サレバ。北野や稲荷にできたれど。根元は此男。エイ恰朴じ

やござらぬか。何が下から持上る。上では若衆が曲をする。是がほんの茶臼芸と。口々いへば紀平次は。梯子を突立こは作り。東西く。扱是より本芸をお目にかけます。先ッは川原の涼なんど。珍らしい見せ物は多からふが。梯子の曲は今度が始め。六間二尺の長梯子。ちよぼ先に舁を立せ。小指に乗て指上くれば公輪魯般が雲にかけはし。天にも届く釣合かね合。上では居合片足だち。(六十九才)とんだりはねたり踊ったり自由自在な鎌の所作。跡は三脚五挺立もつきやく梯子の

始りく。ヤ申く。見れば太鼓を持てござるが。何と借て下さるまいか。おれ一人で打たり舞たり。囃子がなうてはいきにくい。ヲツト皆迄どんど、いふまい。お神楽所へ持つて行がけ。そんならおれが打てやろう。是は重畳忝い。さらば梯子を始ふかと取りなをし指かくれば。禰宜は太鼓をうつ山の蔦かつらの這ごとく。身はさゝがにの糸輕業。下にはあうんの力士立。或は頤肩車。秘曲を尽してへ見へにける。

時分はよしと相図のかけ声心得たりと手を延し。絵馬にかけたる太刀おつ取扱はなし。むさう返し現の太刀。(六十九ウ)光りは雷きりくく。小鮎さばしる山川に。鵜縄をさばく牛若丸鍊磨を得たる太刀捌。数多の見物一同に。いやくどつと。誉けるが。ナント見てか。二人ながらけうとい者の。身の軽さなら力なら。天狗の変化で有ふもしれぬ。ヤそれは

そふと此十六日には。栗田口盛久の新屋敷で大踊が有げなが。平家の大將清盛様が。見物にござる故。惣体名有芸者を呼よせ御上覧に入るからは。此梯子も呼にくるでござらふと。いふをかしこに立聞義平。紀平次は梯子をおろし。先今日は是切りと。扇づかひにあせ入れば。又明日と打連て皆ちりへくに立帰る。

人間を待て義平公。走り寄て(七十才)紀平次が峻はつしと踏倒し。刀のむね打ちうくく。打れて驚く八丁礮。コハ

義平公にてましますか。何誤りに打擲と。いはせも立ず又ふり上置かけて打給へば。姫も驚き走り出牛若丸も諸共に。留ても留らぬ血氣の大將はつたとねめ。斯迄に世を忍び無念を凌は何シの為。何とぞ本懐を達せんと思ふ所に儕が面を晒す計か。生先有牛若迄。俱に恥辱をあたへるは逆も傾く運を考。家を見限ての所為よなと以ての外の御怒。ヲ、お腹立は尤ながら。子細御存なき上は一遍申上ん。今日あらぬ姿と成。此所へ来る事弟志内が最期の砌。御下し給はりし(七十ウ)膝丸の御シ佩清盛が手に入ッて当社へ奉納せしこそ幸イ。何とぞ神に預かり申再び御ン手に入レん為。今洛中にもてはやす梯子の曲に思ひ付キ。若君共言合せ仕終せたる今月只今。義平公は源家の嫡流。代々伝はる印シの太刀。おめく平家の宝とならば弥源氏の武士共迄。二心を発すは必定。そこを存じて此年シ月無念をこらへし折も折。奉納せしこそ天のあたへ。牛若君の手をかつて。神の授る此御太刀。御請取り下さるへしと。敬ひさゝぐる八丁礫。当タつて碎る強意見。忠義の程ぞ類イなき。

始終を聞キ居る人々の。中に義平打笑給ひ。血氣短慮の心より。見そんぜしは我誤り。細瑾を返り見ぬ紀(七十一オ)平次が心ざし。いか計り祝着ぞと。太刀を取ッて頭戴有。今粟田口の噂を聞けば。清盛が見ン物にて踊を催す一趣向。我レも前ぶり剃落し姿をかへて忍び入り。頼朝を奪取り家の敵父の怨。俱に天をいただかぬ清盛が首取ッて日比のもうむをさんぜんと詞にいさみ心には。弓矢神の夢の告明ケていはれぬ胸の闇。めかいの見へぬ老母も氣遣ひ紀平次は立帰。うばが介抱よりくには。味方を招く術をせよ急げ。くと宣へば。紀平次ハツト頭をさげ。栗田口へござらふ共。必短氣は御無用く。コレ常世様お頼申ス。ヲ、何ンの氣遣いさしやんすな。仮にも婿也舅也粗忽な事はござんせぬ。(七十一ウ)案

内^ウがてら付^ツいていて父^{ちち}上に直^{じき}訴訟^{そそ}。頼^{たの}朝^{あさ}様に逢^{あは}せまんと牛^ウ若^わ丸^わの御^ご手^てを取^とり既^{すで}に別^{わか}るゝ其^{その}所^{ところ}へ。以^も前^{ぜん}の社^{しゃ}人^{にん}かけ戻^{もど}り。コリヤ〱わいらは合^あ点^{てん}のい^いかぬ。奉^{ほう}納^{なう}の太^た刀^{とう}を下^{くだ}し居^ゐ合^あにつかふて剩^{あまつさへ}持^もつてい^いのとは横^{わう}着^{やく}者^{もの}。こつちへおこせといはれて紀^き平^{へい}次^じ空^{くう}と^とばけ。コレハ〱麓^そ相^{さう}千^{せん}万^{まん}シ。じたい^{せがれ} 舩^{ふね}が無^む調^{てう}法^{ぽう}。忘^われて上^あつて誤^{あや}り^まをくろめん為^{ため}に大^{だい}事^じの太^た刀^{とう}。ついはずしたと見^みへました。どふぞかけて下^{くだ}さりませと。胸^{むね}しかたを吞^の込^めム義^ぎ平^{へい}。太^た刀^{とう}を小^{せう}脇^{わき}に三^{さん}人^{にん}連^{れん}足^{そく}早^{はや}にこそ帰^{かへ}らるゝ。

コリヤ〱男^{おとこ}。幸^{さい}い様^{さま}子^こも爰^{こゝ}に有^あル。上^かつて見^みたいが成^{なり}ルまいか。ハテどふでかけて羅^らはにやならぬ。そんなら早^{はや}うといふ内^{うち}に。太^た刀^{とう}を渡^{わた}せば提^ひて爰^{こゝ}を大^{だい}事^じと(七十二オ)二^に足^{そく}三^{さん}足^{そく}。あがりかゝれど身^みはわな〱。央^な登^かてコリヤどふじや。扱^あは太^た刀^{とう}を摺^{すり}かへたな。ハゝゝゝ、ヤイ爰^{こゝ}なうつそりめ。正^{せい}真^{しん}はたつた今^{いま}親^{おや}方^{かた}に手^て渡^{わた}した。そこでゆるりと涼^{すずし}で居^ゐよと。様^{さま}子^こをくると打^うかへし。サア蜘蛛^{くも}舞^{まい}の始^{はじ}り〱と笑^{わら}ひて。こそは三^{さん}重^{じゆう}へ帰^{かへ}りけれ。

山城^{やまぎ}ノ国^{くに}粟^{あは}田^た山^{さん}の要^{よう}害^{がい}は東^{とう}海^{かい}道^{だう}の咽^{のど}首^{くび}にて。都^うをかための難^{なん}所^{じよ}をひらき大^{だい}路^ろにつらなる殿^{との}造^{つくり}。池^い殿^{でん}の新^{しん}宅^{たく}とて主^{しゆ}馬^めノ判^{はん}官^{くわん}盛^{もり}久^{きよ}が。兵^ひ衛^{ゑい}ノ佐^さ頼^{らん}朝^{あさ}を預^よかり置^おキし中^{ちゆう}屋^{やく}舗^ぽ。けふ清^{せい}盛^{せい}の御^ご入^いりと掃^{さう}除^{じゆ}の役^{やく}は未^み明^{めい}より。箒^{ほう}放^{はな}さず打^{うち}ッ水^{すい}に池^いもかへはず計^{けい}也^や。

比^ひは文^{ぶん}月^{げつ}十六^{じゅうろく}日^{にち}聖^{せい}霊^{れい}会^{かい}の孟^{もう}蘭^{らん}盆^{ぼん}と。きりこ灯^{とう}籠^{ろう}さま〱をかけ(七十二ウ)ならべたる其^{その}中^{ちゆう}に。いたはしや頼^{たの}朝^{あさ}公^{こう}。過^わつる保^ほ元^{げん}平^{へい}治^ちの軍^{ぐん}に討^{うち}死^ししたる源^{げん}家^かの一^{いつ}門^{もん}。分^わけて御^ご父^ふ義^ぎ朝^{あさ}のあ^あら聖^{せい}霊^{れい}を魂^{たま}祭^{まつ}り。茶^{ちや}湯^{とう}なり共^{とも}備^びへんと臺^{たい}子^すにたぎる湯^ゆ玉^{たま}より。わくかたもなき御^ご心^{しん}。汲^{くみ}てしらるゝ御^ご風^{ふう}情^{じやう}。

盛^{せい}久^{きよ}しづ〱と立^た出^で傍^{そば}近^{ぢか}く指^{さし}寄^{よつ}て。初^{しつ}秋^{あき}の短^{たん}日^{じつ}とは申^{まを}ながら。囚^{とら}はれの御^ご身^みなれば御^ご退^{たい}屈^{くつ}にも思^{おも}召^{めし}サんが。君^{きみ}にも御^ご存^{ぞん}しら

る、通り。清盛公の御弟先キ立チ給ふ家盛に御^{おも}梯^{かけ}の似たる連。御母公池の禪尼^{ぜんに}。世にいたましく歎^{あま}ケきの余^{ひたすら}り。一向の御命乞^{こひ}心を尽^{つく}し給ふ所に。十^とラが九つ御^ご願^{ねが}ひ叶ふべき首^{しゆ}(七十三オ)尾^びなる由。某^{たれ}迄おしらせあれば今^{いま}暫^{しばらく}しの御^ご艱^{げん}難^{なん}と。申上^うテれば涙^{なみだ}をう^なかめ。いかなる奇^き縁^{えん}か。さす敵の子孫^{こそん}さほど迄^{まで}情^{なさけ}有^あル禪尼公の御めぐみ。頼朝生^{しょう}を隔^{へだ}共^{ども}いかで忘れ申すべき。先^{まづ}キ連^つつても申スごとく。親兄弟討死^{うちし}し。某一^{ひと}チ人甲斐^{かひ}なき命^{いのち}助^{たす}かる事本^{もと}意^いとは存^{ぞん}ぜね共。朝敵の名を取り相果^{はて}し。一^{ひと}チ門^{かど}の苦^{くる}提^{だい}をとはん為。遁世^{とんせい}修行^{しゆぎやう}の志^{こころざし}。移^{うつ}りかはるは世の盛衰^{せいすい}是も前世の約束^{やくそく}と。思^{おも}へばいとゞ御^ご仏^{ぶつ}の縁^{えん}によるこそ道なれと。世^うをあぢきなく見^み限^{かぎ}し御^ご詞^し。さへ哀^{あは}れなり。

詞^{ことば}ヲツヲ御尤^{ごより}なる御考^{ごかう}心^{しん}。殊^{ことごと}更^{さら}此池水^{このいづみ}は。御舍^{しやきやう}兄^{あに}大夫^{だふ}ノ進朝^{しんてう}長^{ちやう}。(七十三ウ)都敗北の折柄^{おりからひざ}膝^{ひざ}の口^{くち}を窺^{のぞ}深^{ふか}に射^あられ。一^{ひと}足もす、み給はず。あ^まの刃^{やいば}にて鍔^つを拔^ぬ捨^す。御^ご着^{ちやく}長^{ちやう}にまみれたる血^ちを洗^{あひ}給^はひしより。行^いかふ人の口^{くち}すさみに血洗^{ちあひ}池^いと名付^{なづ}ケしを。幸^{さい}イ拙^{せつ}者^{しや}が支^し配^{はい}所^{しよ}ゆへ。名将^{めいしやう}の御^ご旧^{きう}跡^{せき}。馬^ば路^ろの塵^{ちり}に穢^{けが}んは。便^{べん}ンなき事とあらに構^{かま}へし此^{この}館^{かん}。君^{きみ}とても逆^{さか}縁^{えん}ならず。懇^{ねん}に御^ご跡^{せき}をとむらひ給へと心^{こころ}を付^つケ。俱^くにしほる、時しもあれ。よそは。う^うかる、踊^{おど}声^{こゑ}。あ^ありや、こ^こりや、。アヤツトセイ。とちてんの三^{さん}味^みも太^た鞍^{あん}も。賑^{にぎ}はしき。

頼朝卿^{らいてうけい}はいとゞ猶^{なほ}心^{こころ}おくれし折^はなれば。世^うのいさましさも羨^{うらやま}れ御^ご目^めに。う^うかむ露^るの玉^{たま}。盛^{せい}久^{きう}それと思^{おも}ひ(七十四オ)や^やり。今日^{けふ}は主^{しゆ}人^{にん}清盛^{せいせい}。舟岡^{ふねおか}山^{さん}へ廟^{べう}參^{さん}の帰^{かへ}るさ此^{この}所^{しよ}へ立^た寄^より。土^ど民^{みん}の踊^{おど}を見^み物^{もの}せんと兼^{かみ}て申^{まを}付^け置^おしが。彼^{かの}者^{しや}共^{ども}の参^{まゐ}りしやらん。孟^{もう}蘭^{らん}盆^{ぼん}経^{きやう}にか、れたる。如^に清^{せい}涼^{りやう}地^ちの踊^{おど}りと聞^きケば。是も則^{すなは}ち後^ご世^{せい}の経^{きやう}宮^{みやう}。追^お付^け主^{しゆ}人^{にん}清盛^{せいせい}も来^きらるべし。俱^くに御^ご覧^{らん}じつれぐを暫^{しばらく}く慰^{なぐさ}ましますと。諫^{いさめ}ながらに御^ご手^てを取り伴^{ともな}ひ。へ奥^{おく}へ入^い相^{さう}の。鐘^{かね}に。つれ立^たッ踊^{おど}子^こは。伊^い達^{だて}を浴^ゆ衣^{かた}の染^{そめ}模^も

様。四季の千種を色とりて。姿かたちもふりわけし。思ひく物のずきに。踊手拍子うつ、なくしばらく時をぞへうつし
けり。(七十四ウ)

伊勢音頭入江菰

三下り節
中ウ下

へかうたりやく。しをりんどうかざぐるま。あふぎ車に。水ぐるま。まはれやまはれおぐるまの。花見車に。御所車。
へ伊勢の海。あまのまてかたまてしばしよび声とく人ごとを。たれにかつげの二つ櫛みつしほの。よるの車の我れから
と。ないてわかれしきぬく。袖よ袂ようらみわび。すへはどうなる事じややら。ヨイくくくヨイヤサソレイ。
こつ(七十五オ)ちはさはりのないみさはたゞ。一トすじに糸まきの。しめく、りしてあひの手の。あふ時ばかり引よせ
て。ヨイくくく。ヨイヤサソレイ。うらむてんじゆのくだかけは。八こゑ八つちにあけそめて。サア残る詞もかず
くの人目のせきを忍びごま。よい事ばかりゑ。へまてばかんろの日がらかさ。さしかけ。ハテナアサアく。君に。かざ
す。袖がさひちがさハテナア。サアく。月も笠きてかよふらん。ふみは。いもせの。はしとはいへど。の、のあはぬのと
くぜつのたねに。顔はもみぢのはした(七十五ウ)なく。はもじくや。かさゝぎのはし。だます詞のはしとはほんにしら
つゆの。ふみなかへしそまる木ばし。へあれくかねのこゑぐいつもそひねのわかれちゆふべくのむつごと。袖のしが
らみいくゑのまがき。君にあふ夜のうき名はいやよとかく思ひの。まゝならぬ。へあみださまほんのうじ。たんなうおしや
うじやうねんぶつちうぢはつち。コレ。くくく入れやんしやう。御ゑかう。なむあみだぶつ。くく。なみだに
(七十六オ)声も。しめくくとのこるかたなきおんの程。コレくくく入れやんしやう。御ゑかう。へそれほうさんの

おつとめはへおんさもらさもらみもなんさあ。ゑんちうきちやんゑきちやん。なむおみたうふ。へりんは松むしちりゝんりんへちうゑるすへんききいちゃんせ。すちやんきいちゃんゑんちゑ。なむおみたうふへそれく。九ねんめんぺきあしにうちのりほつすをふり立。く。く。これもほとけのさいどかや。(七十六ウ) 奥より出る下モ部が声々。踊りの下々見をなされしに殊の外お氣に入つた。清盛公の御出に間も有ルまじ。中人に小庭へ廻り支度せよとの御意なるぞ。早くくとせり立テられ。皆我レ一と踊子共爐路の切戸へ入にける。

跡に残りし三人は辺を見廻し立集り。申シ義平様。けふの踊りを幸いにマア爰迄は忍びしが。是からは頼朝様を盗出すが肝心く。其上に首尾もあらば。久しぶりで爺様のお顔もちよつと拝たしと。いふをおさへて高い。汝が父盛久は。正しく敵の家来なれ共。さいつごろ相坂の関所にて。某と紀平次を見通したる武士の情。おことに添も(七十七ウ) 其返シ

礼。併互に隔る中対面は叶ふまし。頼朝さへ奪とらば牛若諸共裏門より。我に構はず密に宿所へ帰るべしと。の給へば常世の前。いか様おまへのおつしやる通り。親子は内証表テ向キは敵味方。逢て悪くは逢ますまい。お詞を背ぬかは

り。かんまへて持病の短氣跡で発して下さんすな。わしはそれが氣にかゝる。ハテ訳もない。今の平家の繁昌。雲を翔り地をくゝ程の勇力が有ルにもせよ。ひとりしての敵対は。石を抱て淵に入ルも同じ事。時節をしらぬ我レにはあらず。此方

には氣遣イない。随分人に悟られな早うくとせき給へば。牛若君おとなしく。兄様(七十七ウ) こつちも氣遣イない。踊りの紛れに最一人りの兄様連してお先キへいぬる。お前は跡からくと。常世の前を案内にて奥の小庭へ入給ふ。跡見送クリ

て義平は。御身にせまる憂思ひ。胸に満くる涙をおさへ。八幡宮の神勅にて。武運に尽しとしつたる某。頼朝さへ盗ミ

出せば運命はけふ限り。せめて敵清盛を一ト太刀恨て死ナん物と。覚悟極し我ぞとは。しらざる事の不便さよと。猛き姿も打しほれ暫し。イ給ひしに。憂を催す蛙の声。思はずかしこにあゆみ寄り。野辺に蛙の鳴声聞けばありし昔が思はるゝと。歌にうたふもやすらはで。過越方の有様を。思ひつゞけし(七十八オ)心の哀さ。実誠此所にて。大夫の進朝長が。去ル平治の戦に膝の口を射られたる。鏃を抜き捨。血汐を洗し跡と聞ク。主シは空敷成たれ共筐に残るは此池水。かげも形も写らぬかと。仁愛ふかき御涙や、むせ。返り給ひしが。あたりにしげる。草葎より六尺計の大蛇声をするべにねらひ寄り。蛙は逃んづ気色もなく岸にひらりと上るを見れば。音に聞イたる三足にて睨詰たる眼の光り。赫々として星のごとく毒氣を吹かけ飛付ク勢ひ。蛇も鱗を逆立てて尾先キにたゝく水煙。透間を窺ひ一ト呑と。紅の舌ひらくく互イに諍ふ面魂。蠱毒の戦ひ是なんめりと。(七十八ウ)一ツ心不乱に守り詰盼もせず立給ふ。程なく両方にじり寄りすはや勝負と見る所に。蛙は前脚ふり上て蛇の頭を二つ三つ。打ツぞと見へしが骸をちぐめ。周章て元トの草葎へとしや遅しと逃ケこんだり。

地色ハル 義平横手をはたと打。ハツハ奇妙く。蛙の三足なる物は。悪ク龍を退治すると。博物志には出され共。目ク前シ見たるは今が始め。さも有レふしぎと件の蛙。引摺んで御覧有レば三足にあらばこそ。前成ル脚に鏃を持ち腹に押し当て隠せし有様。扱はと鏃を引はなし蛙を池へ投ケ込ミ給ひ。武將たる身の賢愚得失。此利にはづるゝ事はなし。蛇の勢ひ強けれ共。鉄氣を(七十九オ)以ッて防といふ。智謀に及ばぬよな。アツアはこそ弟朝長が。抜き捨し鏃ならん。再び源太が手に入ル事。顔見るやうに思はれていと涙のかげ写す。此池水にはらからの縁をひかるゝ弓矢の道。奇代の業を見し事よと忙然。として

立チ給ふ。

後^{うしろ}の方に羽^は響^{ひび}高く。矢^や一つ来^くつて庭^{にわ}の立木^{たつき}にはつしと立^たッ。ハツト驚^{おどろ}立^たチ寄^よッてよく見^みれば的^{まと}矢^や也。扱^うこそ内通^{うちど}ござんなれと。矢^やをかなぐつて見^み給へ共。矢^や文^{ぶん}なければ眉^{まゆ}をしはめ。烏^{からす}羽^はを的^{まと}矢^やなんどに矧^はざるは弓^{きう}矢^やの故^こ実^{じつ}。ム、げに思^{おも}ひ出^でしたり。烏^{からす}羽^はにかく言^{こと}の葉^はといふ事^{こと}あれば。子^こ細^{さい}は是^{こゝろ}にと鐘^{かね}子^こすに向^{むか}ひ。淫^{おん}々と涌^わ返^{かへ}り滾^{たぎ}湯^る氣^け(七十九ウ)にて羽^はを蒸^む。紙^しに写^{うつ}せば左^{ひだり}リ文字^{もじ}。一^{いつ}ッ点^{てん}違^{ちが}はず頭^{かぶ}はれしは。惠^ゑ源^{げん}太^た義^ぎ平^{へい}牛^{ぎゅう}若^{じやく}常^{じやう}世^せを引^ひ連^れして踊^{おど}に紛^{まぎ}れ忍^{しの}び入^いりしを見^み付^けしなり。搦^{からめ}捕^{とら}て見^み参^{さん}に入^いられよ後^ご詰^めには難^{がた}シ波^{なみ}ノ次^{つぎ}郎^{らう}瀬^せノ尾^お太^た郎^{らう}兼^{けん}康^{かう}殿^{でん}と。細^{さい}字^じながらもありくと読^よ終^{はつ}て色^{いろ}も変^へぜず。扱^うは源^{げん}太^たが入^い込^こミしを。早^{はや}敵^{てき}にしられしな。よし／＼元^{もと}より覚^{かく}悟^ごの命^{めい}。ちつ共^{とも}驚^{おどろ}く事^{こと}ならず。敵^{てき}の大^{だい}将^{しやう}清^{せい}盛^{せい}に出^いッくはせ。矢^やの一^{いつ}本^{ほん}も放^{はな}さずして。討^う死^しせん事^{こと}残^{ざん}シ念^{ねん}シに有^あべきが。幸^{さい}イの此^{こゝろ}的^{てき}矢^やと。くつ卷^{まき}よりほつきと折^をり以^{もつ}前^{ぜん}シの鏃^{やね}をしつかとすげ。弓^{きう}はなく共^{とも}義^ぎ平^{へい}が此^{こゝろ}片^{かた}腕^{うで}こそ五^ご人^{にん}張^{はり}。手^て突^つきに成^{なり}共^{とも}最^{さい}期^きの(八十オ)一^{いつ}ト矢^や。目^めに物^{もの}見^みせんと小^こ踊^{おど}して今^{いま}や遅^{おそ}しと。待^{まち}ツ間^{かん}もあらず。清^{せい}盛^{せい}公^{こう}の御^ご入^いりと表^へテに呼^よはる一^{いつ}ト声^{こゑ}は。春^{はる}を待^{まち}チ得^えし鶯^{うぐいす}の初^{はつ}ッ音^{おん}を聞^きキ其^{その}嬉^{うれ}しさ。いさみすゝんで前^{ぜん}裁^{さい}のしげみに。へ暫^{しば}し忍^{しの}ばるゝ。程^{ほど}なく来^きる乗^{のり}物^{ぶつ}の。前^{まへ}シ後^ご左^さ右^{ゆう}に近^{きん}習^{じゆ}小^こ性^{じやう}礼^れ義^ぎ正^{せい}しく付^{そへ}キ添^{そへ}ば。主^{しゅ}馬^ばノ判^{はん}官^{くわん}盛^{せい}久^{きう}御^ご迎^{むかひ}の為^{ため}走^{はし}り出^で。御^ご慰^{なぐさ}の踊^{おど}り子^こ共^{とも}先^{せん}キ達^{だつ}ツて召^{めい}シよせたれば。直^{ちやう}ク様^{やう}奥^{おく}へ御^ご乗^{のり}リ物^{ぶつ}参^{さん}れくと声^{こゑ}かけられ。お坪^{つば}の内^{うち}を廻^{まわ}り掾^{えん}帳^{ちやう}台^{だい}深^{ふか}く昇^か込^こば。盛^{せい}久^{きう}あたりに心^{こゝろ}を付^つケ引^ひ添^{そへ}てこそ入^いにけれ。

義^ぎ平^{へい}木^き影^{かげ}を踊^{おど}り出^で天^{てん}にも上^ある心^{こゝろ}地^ちにて。かけいらんとする所^{ところ}に。ソレ／＼／＼やつとせい。瀬^せノ尾^お太^た郎^{らう}兼^{けん}康^{かう}(八十ウ)古^こ市^し伊^い藤^{とう}五^ご忠^{しゆ}清^{せい}。又^{また}こなたより難^{がた}シ波^{なみ}ノ次^{つぎ}郎^{らう}根^ねの井^いの大^{だい}弥^や太^た。いづれも踊^{おど}りの出^で立^{たち}にて。平^{へい}家^かに名^なを得^えし力^{ちから}自^じ慢^{まん}。我^{われ}レ組^{ぐみ}と

めんと取巻たり。義平ちつとも驚かず。ハ、ハ、ハ、あざ笑つて立給ふ。四人一度に睥し。踊りの拍子をかけ声に。ソレ
くそこらでせいと大弥太が。油断を見す腕がらみ。もちつてかゝるを打払ひ。ヲ、サテ合点じやコリヤくくく
やつとやあ。ぶち付けられてはしかみ頼。そつちでせいと尻込す。イデ伊藤五が問ぬけの拍子。ヤシツく。しづくしな
へて柳でせいとしがみ付く。ヲツヲ適身ぶりは大名イ人。併踊りは音頭が大事。松坂よりは死出の坂。(八十一才)こさ
せてくれんと弱腰つかみ目より高く指上て。一ト振ふつて七八間投付け給へば飛石に。頭びつしやり打砕れあへなく息は
絶てげり。

是にもこりぬ瀬ノ尾の太郎請取ツたりといふ儘に。向ふへ廻つてしつかと抱を諸手おさへの腕留。コレくくくくくくく
がしでこいと翻倒す。返してせいと起直り。ありや。く。こりやくくくまかせてな。おせ共ひけ共大盤石。ヨイく
く。よいやさつと蹴飛され。のめりを打ツにきよつとして。指詰跡は此難波。元来拙者は踊りが嫌ひ。誰レに成り共渡し
たと言ひ捨てこそ逃ケ行を。義平手早く矢を追ツ取り。はつしと打たる手裏剣に。背骨より胸板迄(八十一才)たつた一ト矢
にもんどり打ち。目計りきろくうごめくを。飛か、つて足下にふまへ。志内の六郎景澄を。此義平と取ちがへ二条川原で
討たる時。終には一チ念シ雷と成つて引裂捨んといふたる由。其亡魂の鳴神也。思ひしれと両足摺。左右へさつと引裂
給ふ。是を末世に誤つて。難波は雷に裂れしといひ伝へしも理り也。

所詮手取りに叶ふまし。ソレ討留メよと瀬尾が下知。畏て大勢が一チ度に抜キ連レ切つてかゝる。悪源太は火雷神のあれた
る勢ひ。うぬらに刃が入べきかと。大石樹木の嫌ひなく。手に当たるを幸いに引抜キ引上打付け給ふ有様は。氷をふらす

ごとくにて。さしも（八十二オ）の大勢人乱れ爰をせんどゞ三重へふせぎしが。

大強力士の働きに何かはもつてたまるべき。皆ちりぐに逃アちつたり。エ、ごくにも立ぬからくためらに詮もなき隙づ

いやし。目ざす相イ手は清盛一チ人。イテ見ン参ンとかけ寄ル向ふの障子の内。思ひも寄ラぬ競瀧口牛若丸に縄をかけ。抜キ

身を咽に指付クれば。同じくこなたに盛久も頼朝を高手小手。身動きせば只一ト突と眼コをくばつて立ッたる有様。見るよ

りハツト気もおくれ。ヤレ聊爾すな兩人とあなたこなたを押しとゞめ儘。果てぞおはします。

盛久さこそ声をかけ。池の禪尼の情によつて。此頼朝の命を御聞キ届はあんなれども。（八十二ウ）悪源太義平討死とは

偽りにて。此世にながらへ居るは治定。彼レを擲出すならば速に助クべしと。院の御所より綸命故清盛の御入りと

偽リ。瀧口としめし合せ斯踊りを始めしは。貴殿をたばかり寄ン計略。所詮遁れぬ御ン命尋常に縄かゝられよ。夫れ共に

得心なくば今頼朝を手につけふか。ヲ、瀧口も其通り一ツ旦助ケし牛若丸。再び擒となられしは運の尽。生死は御ン身の

心に有り返答次第に討はなす。ナアくくと両方よりのつづきならぬ手詰の場所。さしもの義平詞なく途方に。くれし御

風情。頼朝卿どつかと座し。二人の命助からんとて現在の兄上。擒（八十三オ）にさせるは不孝の罪。天の冥罰恐ろし

し。ヲ、それく。ながらへたり迎稚者共。兄様のかはりに死るは望む所。サア手につけよ瀧口とおとなしやかに御兄弟。

かくご極めし御ン顔ばせ孝心肝にめいずる上。思ひ出せし夢の告。八幡宮の御神ン託あたかも符契を合せしは。今此時の事

なつしと。持ッたる的矢をからりと捨テ。ハツア天なるかな命イなるかな。生死盛衰は前生の禍福による。汝等は秀ずる運

我レは傾く運命イにて。身体髪膚今爰に滅する時節到来せり。サア縄かけよと後手に座をしめて待チ給へば。ホウ神妙く。

御得心の上盛久が縄かく(八十三ウ)るには及ばね共。大法なれば力なしと兼て用意の縛縄。かゝる恩愛かけるも情。互の心ぞたのもしき。

斯と聞より常世の前人目も構はず転び出。ハツト計に縋り付き正体。涙にくれけるが。漸に氣を取りなをし。ふり返つてコレ爺様。わしが夫トはお前の聲。舅は親の慈悲もなく。踊りを始め清盛の上覧と嘘の有ル拵事。ようもく釣よせて手柄そふに縛しやんした。邪見な共どうよくな共人が聞たら誉ませうぞ。放逸むざんなんと様と恨。歎けば。ヤアと、様とは誰カ事。此盛久に娘はないぞ。それ共是非我子なれば敵味方(八十四オ)と隔る中。未来迄ソレ夫婦にはなられぬがや。我レとても木石ならず一旦見通し置いたれ共。院の御所の嚴命には慈悲も情も叶はこそ。大の虫を殺し小の虫を助け置キ。御出ツ家となせば院宣も背かず禪尼公の願ひも立チ。瀧口と此盛久が志も立ツ道理。ナ合点がいたか。ム、すりやどふ有ッてもお命は。助からぬ。そんなら此世で添事も。叶はぬ事ならぬ事。ハテ夫婦は二世といふではないか。未来の縁をなぜ結ばぬ。ホンニそふじや。たとへおくれ先立ッ共二世の契りはたがへじ物と。懷釵逆手に抜き放し。既に自害と見へければ瀧口かけ(八十四ウ)寄刀をもぎ。手早く捕縄しつかとかけ。朝敵の義平とかたらひし女。あたゝかに自害させふや。俱ともに御前へ引すへて首を刎る。とはする物の女なれば品によつて助かるまい物でもない。其時は尼共成夫トの菩提をとふたがよい。ア、我レも人も娘を持此世で添れぬ夫トの為。眼前死るをとめもせず見殺しにする親の心。能似た事と存るから盛久の心のせつなさ。推量致いて居申すと。身につまさるゝ涙につれ。泣ぬ顔する盛久も目を摺こする計り也。常世の前は顔を上。ア、有がたや忝なや。別れくに死んより夫ト諸共殺されて。死出の山路(八十五オ)も三途の川も

連^ウれて渡るがわたしが本^{もう}望^ウ。よう縛^{しば}つて下^色さんしたといひつゝ、見合^ウす夫^ウトの顔^ウ。身^ウすばらしげなしよげ鳥^ツの番^ツかゝりし捕^{とり}縄^なを。はかなき身^みにし悦^エぶは泣^ナくよりは猶^{あはれ}哀^ななり。

義^{地色ウ}平^ウも打^ウしほれ。や、御^ミシ涙^{ナミ}にむせばれしが。神^ミ明^ミにも見^ミ離^{はな}され。天^ウより請^ウたるいましめを悔^{くやむ}にはあらね共^ニ。死^シすべき時^{トキ}に死^シなざれば死^シにまさる恥^チ有^{アル}ならひ。過^カキつる平^{ヘイ}治^チの合^カ戦^{セン}に討^ウ死^シをすべかつしに。八^ハ丁^{テウ}礮^{パウ}紀^キ平^{ヘイ}次^ジが諫^{いさめ}を用^ユひ。無^ム念^{ネン}の命^{メイ}を生^シキ延^{のび}て。義^{地ウ}平^ウ程^{チョウ}の武^ぶ士^シが、かゝる縄^な目^めの恥^チ辱^{じよく}を見る事^{コト}。よつく武^ぶ運^{ウン}に尽^つ果^{くわ}しと御^ミ憤^{フン}りを盛^セ久^{キウ}が。思^{オモ}ひ（八^{ハチ}十^{ジュウ}五^ゴウ）はかつてずつと立^タチ。以^モ前^{マエ}シの的^{マキ}矢^ヤをひろい上^ウ。コハ心^{ココロ}得^エぬ御^ミシ仰^{オウ}。惡^{アク}源^{ゲン}太^{タイ}義^ギ平^{ヘイ}公^{コウ}は待^{たい}賢^{けん}門^{もん}の夜^ヤ軍^{ぐん}に。花^{ハナ}々^々敷^敷ク討^ウ死^シなされ名^ナを一^{イチ}天下^{てんか}に上^ウ給^くふ。今^{イマ}又^{マタ}縄^なをかけたるこそ。盛^セ久^{キウ}が館^{やかた}を駭^{さは}し難^{がた}波^はノ次^じ郎^{らう}をあやめたる。仕^し組^{ぐみ}踊^{やう}り^二の奴^{やつこ}ならずや。其^{その}証^{しやう}拠^こに後^{こう}代^{だい}迄^{いた}御^ミ名^なを包^{つつ}む為^{ため}なれば。此^{この}鏃^{やのね}を印^{いん}シに立^タ。則^{すなは}チ爰^{こゝ}を茶^ち店^{てん}にしつらひ奴^{やつこ}茶^ち屋^やと名^なを付^つけて。往^ゆ来^きの旅^{りょ}人^{にん}に一^{イチ}ッ服^{ふく}の茶^ちを施^ほし。頼^{たの}長^{ちやう}公^{こう}と御^ミ身^みの後^{こう}世^{せい}。御^ミ菩^ぼ提^{だい}の種^{たね}を残^{のこ}さん是^{こゝ}にて御^ミ心^{しん}はれ給^くへと。申^ま上^うれば御^ミ悦^エび。扱^はこそ末^{まつ}世^{せい}に至^{いた}る迄^{いた}粟^{あは}田^た口^{くち}の奴^{やつこ}茶^ち屋^や。鏃^{やのね}を表^{やう}テに鋸^{かぎ}しは此^{この}こととほりとしられたり。

契^{けい}約^{やく}なりと瀧^{たき}口^{くち}盛^セ久^{キウ}（八^{ハチ}十^{ジュウ}六^{ロク}オ）二^ニ人^{にん}のいましめ引^ひほどけば。頼^{たの}朝^{ちやう}源^{げん}太^{たい}に打^ウ向^{かう}ひ。君^{きみ}にかはつて我^{われ}レ^レが道^{みち}ならぬ命^{いのち}助^{すけ}るも。一^{イチ}門^{もん}を引^い接^{じやう}せん為^{ため}。是^{こゝ}より菩^ぼ提^{だい}の門^{もん}に入^い難^{なん}行^{ぎやう}苦^く行^{ぎやう}身^みをこらさば。法^{はふ}中^{ちゆう}の友^{とも}婦^ふ依^いの僧^{そう}俗^{ぞく}。国^{くに}々^々より集^{あつ}まる事^{こと}。稻^{たう}麻^ま竹^{ちく}葦^{あし}のごとくせん。其^{その}時^{とき}入^い院^{いん}は高^{かう}山^{さん}林^{りん}下^か牛^{ぎう}若^{じやく}法^{はふ}師^しを先^{せん}キとして。諸^{しよ}人^{にん}を勧^{すす}める出^で張^{ちやう}をかまへ。誦^{じゆ}經^{きやう}念^{ねん}仏^{ぶつ}の鯨^{きやう}波^は二^ニ六^{ロク}時^じ中^{ちゆう}に鐘^{かね}太^{たい}鼓^こ。乱^{らん}調^{てう}に打^ウ立^だく。唐^{たう}旗^{はた}いほり幡^{ばん}のはた山^{さん}の手^てに吹^フなびかせ。仏^{ぶつ}ツ敵^{てき}大^{だい}敵^{てき}衆^{しゆ}生^{じやう}の迷^{まよ}ひ。悉^{ことごとく}さいどして終^{つい}に名^なイ眼^{げん}名^{めい}僧^{そう}の。德^{とく}を四^し海^{かい}に施^ほす事^{こと}頼^{たの}朝^{ちやう}が方^{はう}寸^{すん}に候^{こう}と。仏^{ぶつ}ツ道^{だう}修^{しゆ}行^{ぎやう}によそへたる軍^{ぐん}術^{じゆつ}勝^{かつ}てたくましき。（八^{ハチ}十^{ジュウ}六^{ロク}ウ）義^{地色ハル}平^{ヘイ}すくく勇^{いさみ}をな

し。我^詞今^こ生^{じやう}の置^みキ土^み産^{やげ}初^う発^{はつ}心^{はな}の銭^ぜ別^べせんと。腰^{地ハル}に帶^{たい}せし一^いト腰^{フシ}を牛^う若^{じやう}に取りつがせ。出^詞家にいらざる賜^{たま}なれ共。利^り釵^{けん}即^{そく}是^ぜ弥^み陀^だ号^{がう}と聞^きクなれば。此^{地ウ}一^いト腰^{こし}を枕^{まくら}に立^あテ惡^{あく}鬼^き邪^{じゃ}鬼^ぎを切^は払^{はら}ひ。其^{ハル}身^みの守^{まも}りに致^{いた}せよと渡^わし給^{たま}ふは祇^ぎ園^{えん}にて奪^ば取^とり置^おカれし膝^{ひざ}丸^{まる}の御^{ハカセ}ン佩^{はい}。コハ有^あがたしと押^おシいただき。是^{ハル}今^こ生^{じやう}の別^べれそと思^{おも}へば目^めくれ心^こきへ。見^みかはす顔^{かほ}に百^{ひゃく}千^{せん}行^{かう}落^{らく}る涙^{なみだ}の諸^{もろ}袂^{たもと}引^ひカる。名^な残^{ざん}しほる、袖^{そで}。帰^{かへ}らぬ旅^{りょ}に誘^{さそ}ひ行^ゆ。

無^{地ウツ}常^{じやう}の風^{ふう}は時^{とき}待^{まち}タで。ちりぐちらず哀^{あい}傷^{じやう}離^り別^{べつ}。尽^つせぬ歎^{なげ}ケき取^とりに取^とル伝^{でん}へたる梓^{あづ}弓^{きやう}。当^うタつて碎^{くだ}る武^ぶ士^しの義^ぎ心^{しん}にかゝる縛^{しば}縄^{じやう}。死^うる計^{けい}りか一^いト筋^{すぢ}の道^{みち}有^あり(八^は十^{じゅう}七^{しち}才^{さい})頼^{たの}み有^あり明^{めい}ケの。月^{つき}もる庭^{には}に一^いト踊^{おど}り。来^きて見^みよかしのやつこの此^こ。奴^{やつこ}姿^そを其^きまゝに奴^{やつこ}茶^ち屋^やとて今^{いま}の世^よも。残^{のこ}る鏃^{やぐ}を印^{いん}シぞと。見^み返^{かへ}りく人^{ひと}々は立^たチわか。れてぞひかれゆく。

第五

龍^{りゆう}蛇^{じや}蟄^{ぢつ}して天^{てん}上^{じやう}の時^{とき}を待^{まち}ツ事^じ三^{さん}千^{せん}日^{にち}。其^そ洛^{らく}事^じ大^{だい}なりとかや。兵^{へい}衛^ゑ佐^さ頼^{たの}朝^あ卿^{けい}池^ち殿^{でん}の情^{じやう}ケによつて。御^おン命^{めい}助^{すけ}かり給^{たま}ひけふぞ都^とを伊^い豆^{ぢう}ノ国^{こく}。遠^{おん}流^{りゅう}のさた極^{ごく}りしと。聞^きクと等^{ひと}く紀^き平^{へい}太^{たい}兄^{けい}弟^{てい}。若^わ君^{きみ}をかき抱^{いだ}き御^い暇^ま乞^{こひ}申^{まを}さんと。急^いげば廻^{まわ}る湖^{みづうみ}の陸^{りく}をいさせき瀬^せ田^たの橋^{はし}。暫^{しばし}く休^{やす}らひ居^ゐたりしが。

数^{地色ウ}多^{あまた}の旅^{りょ}人^{じん}驕^{きやう}立^{たち}チ。ソリヤ囚^{めしうと}人^{ひと}がもふ爰^{こゝ}へ。くるは(八^は十^{じゅう}七^{しち}ウ)く^とと声^{こゑ}々に夕^{ゆふ}日^{にち}まばゆき並^{なら}松^{まつ}の。葉^は越^こにきらめく鑢^や印^{いん}シ先^{まづ}キ備^{そな}へのかちの者^{もの}。往^ゆ来^きを払^{はら}ふ牢^{ろう}興^{こう}の跡^{あと}に引^ひ添^{そふ}競^{けい}瀧^{たき}口^{くち}。警^{けい}固^この役^{やく}目^めおもく敷^ふク心^{しん}を。配^{くば}てあゆみくる。

それと見るより小^こ腰^{こし}をかぐめ。暫^{ざん}時^じの対^{たい}面^{めん}希^{まれ}奉^{ほう}ると。いふに瀧^{たき}口^{くち}牢^{ろう}興^{こう}立^{たち}させ。佐^{すけ}殿^{でん}を出^でし参^{まゐ}らすれば御^おン前^{まへ}に畏^{かしこま}り。御^おン命^{めい}に恙^{つつが}なき段^{だん}承^{しょう}はり。悦^{えつ}ぶ中^{ちゆう}にも遠^{おん}流^{りゅう}とあれば又^{また}御^お対^{たい}面^{めん}も叶^{かな}ふまじ。せめては路^{みち}次^じに待^{まち}チ請^{いん}御^お暇^ま乞^{こひ}仕^しらん為^{ため}参^{まゐ}上^{じやう}と。

懷^{ふところ}より若君の御顔を指向^{むか}ければ。頼朝も涙をうかめ。ふしぎに命助るといへ共在俗^{ざいぞく}の望^{のぞみ}なく。伊豆ノ国に着^{つく}ならば。剃髮^{ていはつ}染衣^{ぜんゑ}の身となり一^{いち}門^{もん}の。菩提^{ぼだい}をとふ（八十八才）のみ他事^{たじ}なしと打^{うち}しはれての給へば。紀平太案^{あん}に相違^{さうゐ}して無念^{むねん}の顔色^{がしよく}見て取^とル瀧口^{たきぐち}。ア、年^{とし}は寄^よるまい物。此間^{こゝ}はめつきりと目もかすみ耳も遠^{とほ}く。此湖^{このみづうみ}の波音^{なみづ}トさへ不通^{つう}に聞^{きこ}へぬ。鉄鞞^{かねつぽどう}同然^{ぜん}なれば。何いふてもしらぬが仏。ちつ共遠慮^{えんりよ}はない事と。家来^{けらい}を遠^{とほ}ざけ片寄^{かや}て。空耳^{そらみみ}つぶす情^{なさけ}の程。紀平太はちかく指^さより。コはいひ甲斐^{かひ}なし我君^{われきみ}。御父^{おと}の仇^{あだ}をも討^うたず。此儘^ま御出^{ごで}ツ家なされなば。数代^{すだい}つゞきし源家^{げんけ}の破滅^{はめつ}。形^{かたち}は墨^{すみ}に染給ふ共。かへつて不孝^{かう}不義^{ふぎ}の大罪^{たいざい}。御身^{ごみ}一人^{ひとり}りにせまるべし。危^{あやう}き命まぬがれ給ふは。御運^{ごうん}めでたき瑞相^{ずいそう}。早く御謀^{ごぼん}叛思^{はんし}し召立^{めいたち}給へ（八十八ウ）と。紀平治諸共^しす、むれば。頼朝^{たのち}も気色^{きしき}を正^{ただ}し。今^{いま}は何をかつ、まん。情有^{じやうゑ}ル池殿^{いけどの}の命乞^{いのこひ}を幸^{さい}いに。出家^{しゅつが}を偽^{いつはり}り助かつて。天の時地の理をはかり。亡父^{ぼうふ}の怨^{あだ}を討^うち亡^なし。ふた、び源氏の代にかへさんと。思ひ立たる我所^{わがところ}存^{ぞん}。汝等^{なんぢら}ならで明^{あき}かさぬ大事^{だいじ}。当時^{たうじ}平家の勢^{いきほ}ひに草木^{くさく}も靡^{なび}く時節^{じせつ}なれば。必^{かならず}秘^ひすべしと。の給へば兩人^{ふたり}も安堵^{あんど}の思ひをなす所に。問^うぢかき森のしげより責^{せめ}鼓^{つみ}責^は太鞍^{たゐ}。風^{ふう}にこたまの梢^{こぎす}をならし鯨波^{きんぱ}をどつとぞあげにける。人々^{たうた}驚^{おどろ}き何事^{なんじ}といふ間^まもあらせず瀬ノ尾^{せのび}の太郎兼康^{たうらうかねやす}。手勢^{てしやう}引^ひぐしかけ参^{まゐ}り。送^{くわ}りの警固^{けいこ}瀧口^{たきぐち}は院^{いん}の（八十九才）御所に仕へるといへ共。元^{もと}源氏の侍^しなれば路次^{ろじ}の間も油断^{ゆだん}ならず。斯^{かく}あらんと思ひし故討手^{こうち}に向ひし某^{なぞ}。先^{まづ}達^{たつ}ツて是^{こゝ}に待^{まち}テ請^{こゝろ}様子は聞^{きこ}た。謀叛^{むはん}人の頼朝主從^{らいしやうしゆじゆ}瀧口^{たきぐち}ぐるめ討^うて取^とル。覚悟^{かくご}ひろげと呼^{よび}はつたり。紀平^{きへい}太兄弟^{たいけい}まつ先^{さき}キにつつ立^た。うぬが分際^{ぶんさい}でいかめしく討手^{うちて}呼^よはり片腹^{ぺんぷく}いたし。幸^{さい}いだきし若君^{わがきみ}の母様^{ふさま}芙蓉^{ふよう}の敵討^{てきうち}よい所へよふうせた。そつ首落^{くち}すに手は見^みせぬうせいとと拔^ひキ放^{はな}せば。家来^{けらい}は主^{しゆ}を討^うせじと拔^ひキ連^つく切^きてかゝるを事共^{ことども}せず。

紀平次瀧口わつて入打合ヲ刃音てうくく。蝶鳥翅のかけりをなし四方八方じうわう微塵なき立く三重へおふて行。(八十九ウ)

跡には紀平太若君いただき。片手に打あふ千變万化秘術を尽し戦ひしが。瀬尾がいらつて打刀紀平太ひらいてなぐる太刀。瀬ノ尾が左の高股をはらりずんど切落トせば。かつばとまろぶをたゝみかけ。若君の手に持ち添たる刀にぐつととめの本望。軍勢残らず討取ッて紀平次瀧口立帰れば。頼朝様悦喜限りなく。瀬ノ尾が討ッ手は己がはからひ平家にしらざる事なれば。只何となく伊豆ノ国に向ひ。年内を経ず旗上せん。紀平太は甲斐ノ国紀平次は信濃路。いづれも軍勢駈催し不日にしらせあふべしと。いさみの詞くもりなき氏(九十オ)神擁護の恵にて。一ツ天四海をしろしめす智仁勇備の大將軍。其名も高き源下の誉は代々に灼然し。末栄へ行万々歳。天下泰平国豊竹の。一ト節千代こめて納る。御代こそめでたけれ

延享四丁卯歳

七月廿八日

並木周藏
作者 安田蛙桂

浅田一鳥

(九十ウ)